電子の海にボトルメールを

　夜の海。海岸線に沿ってふらふらと揺れるように一歩ずつ進む。静けさは女にとって耳が痛く感じるほどであった。明るくにぎやかなところについさっきまでいたことを考えれば、容易に想像できることではあったが。夏の盛りは既に去り、時折塩辛い水に触れる足は想像以上の寒さに振るえるほどであった。あらゆる互換への刺激を無視しながら、女の思考は一つに集中していく。

「どうして、幻実還っていうんですか？　ねぇ」

幻実還……それは、女の所属する文芸部が無料配布している部誌の名だ。女も同じ疑問を持ち、過去の部誌を漁ったりしたりしたものだ。わかったのは少なくとも現存している十一年前から使用されていること、のみ。この真実にぶつかったとき、女には二つの考えが浮かんだ。一つ、それは、文芸部で温めている親交も心と頭をうならせて書いている作品も、このように、知られることのない「過去のもの」になるかもしれぬという考え。もう一つ、文芸部に集う人間の性質が変わっていないのなら、「解けないナゾ」として後続に残し悩む様などを想像し楽しんでいたのではないかという考え。十一年前ならここでどうしようもなく思い付きのままだったろう。しかし、時間は確かに動いていた。

女の握りしめる文明の板が伝達を受け光り震える。何代も前の先導者にあう手段も、進行や作品を永遠のものにする手法もすべてがこの中にある。可愛い後輩からの答えを自分は持たないなら出題者に聞けばいい。ノスタルジーを解するには私は若すぎる。だから、すでに過ぎ去ってしまったモノも現在へ無理やり戻すような所業をどうか許してくださいね。女は思い付きを現実にするために動き出した。しかし、部誌もサークルも女のものではない。だから、巻き込むことにしたのだ。個人のものではないものをさも個人の物のように扱いたくはなかったという理由もあったが。

「過去という幻を現実に還す。私の目的も文字通り幻実還、ですね」

届くことを願い、現実の海より広大で、しかしたどり着く可能性のある電子の海にボトルメールを投げ入れることにしたのだ。